方向

第一二六号　一九九一年三月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

歌人・大塚五朗　（一七）

1991.2.1　原田憲雄

山茶花

一九三六年（つづき）　五朗、三十九歳。

『水甕』十二月号。

梳紙（すきがみ）が乾されて真昼閑（しづ）かなり百日紅の花咲ける庭

薮かげのここにはいまだ（ここはいまだも）日のささずほのかに白し（白き）水引の花（続風土二〇二「嵯峨野」）

誰もゐぬ嵯峨の落柿舎さらさらと雨戸にうつる竹やぶの影　（庭二九）（続風土二四一五・二〇三）

青々と松（竹）の林をぬけて来る風は音立つ庭の笹生（ささふ）に　（庭三〇）

竹藪を洩れてさす日のうす青さ石碑の文字を読みつつぞ佇（た）つ　（〃）（続風土二〇三）

椎の樹がこぼす雫に朝を夕（よ）をぬれて去来の墓つつましき　（庭三〇）

いづこよりか（いづこにか）牛の鳴くこゑきこえゐつ（ゐて）日は竹やぶの上に曇りぬ（庭三〇）（続風土二六七・二〇三）

昭和十二年一月号。

朧風もそれて日和の定まりぬ庭に咲きつぐ山茶花の花

雪一つ白く浮かびて秋空の色は定まる深くしづけく

秋日ざし豊かにてりて山茶花に蜂のうなりの二つまた三つ

秋をすでに山に来て鳴く頬白のつつましき音や聞くにしづけき

寒々と夕日になれる松山のしんかんたるに人のしはぶく

硝子戸にうつりて青き庭竹のそよぎも冷えて日和崩るる

夕時雨いつしかやみて寒々し青き月夜となれる竹やぶ　（庭一四）

月夜すでに更（ふ）けて青める竹やぶに霜の結ばん気配鋭き

開通に間もなき電車通すがすがし遠見の比叡朝ばれの空に

二月号。

一乗寺詩仙堂

ここだくも散りて地にしく山茶花や詩仙堂の門にしばしわがたつ

詩仙堂の門くぐる時吹きぬけし風は山茶花の花を散らせり　（庭三　「一乗寺村二首」）

下駄が二足あるばかりなる玄関におぼめきてさす日は午後づきぬ　（〃）

人の気配なければただに引返す詩仙堂の門に白き山茶花

山峡に遊ぶ

山行くと心ひそかなり行き逢ひし人に礼（ゐや）して道をゆづりぬ

時折に時雨れて山はひそかなりむかうの谷を雉の鳴く声

さす日光（ひかげ）身にしみじみと行く山の向山はいま時雨わたれり

たつた今時雨こぼせし冬空の青々として樹の間より見ゆ　（庭二四）

ひそひそと峡を通る村時雨さるとりばらの実をぬらしたり

山中に煙草きれしを喞（かこ）ちつつ子のキャラメルを貰ひてくひぬ

二つゐて寂しくもあるか鳴の鳥見てゐしが遂に鳴かざりにけり

煙突のむかうに澄める冬の空雲一つ浮きて動くともせず

この年は昭和十一年にあたり、一月十五日、ロンドン軍縮会議で日本全権が脱退を通告。二月十七日、中共紅軍が抗日東征を宣言。二月二十六日、一部の青年将校が千四百人の兵をひきいて内大臣斎藤実らを殺し永田町を占拠したいわゆる二・二六事件があり、八月一日、第十一回オリンピックがベルリンで開催され、このころ政府は中国大陸と南方の進出と軍備拡充を定め、十月にはローマ・ベルリンの枢軸が結成されるといった事件があり、軍国化が急速にすすむ。だが六月には、世界一周の旅をしていたフランスの詩人ジャン・コクトオが日本に立ちより、九月には、島崎藤村・有島生馬が第十四回国際ペンクラブ大会に出席するなどのこともあった。

一九三七年　五朗、四十歳。京都府立京都第三中学校教諭。住所、京都市上京区等持院中町。松子、三十九歳。朗、十七歳。喜子、十三歳。樹、九歳。哲、六歳。迪子、三歳。

三月号。

庭に来て鳴く山鳩を見てありぬ酒に疲れし元日の午後　（庭一四）

追羽根に子等と興ずる妻の声聞きつつ眠し酒に疲れて
正月もすでに七日と日は経ちて今朝おく霜に心緊れり

蟹満寺に遊ぶ

冬霞ほのけき山は国原のきはみとたてる伊賀伊勢の山
おのづから暗きになれし目の前に大き胡坐（あぐら）の仏いませり　（庭三一）
み仏は美男におはすと聞くからに蝋燭をつけてわれはのぞきぬ
あぐら組みてほのかにいますみ仏の膝のあたりに日光（ひかげ）とどきぬ
この冬の暖かさなど言（い）ひ出でつ布施（ふせ）おくしほをつくらんとする　（庭三二）
山間を一筋寒く（遠く）流れたる冬川に日のさすはさびしき　（庭三三）
冬の日の照るとはなけれわがいゆく河原に風が吹きて明るき　（〃）
対岸を河川工事のとろゆけり霧れて寒けき冬空の下（した）　（〃）

龍安寺林泉

山裾の林の奥に照らふもの池ありて夕べ霧わきあがる（たちなびく）　（庭三六）
夕明り保ちて久し泉石（しま）の池に遊べる鴉はただ一羽なり

四月号。

朝よりの雨はれんとすらし夕比叡に片居し雲の動きそめつつ

月ながら雨の降るよとひとりごち夜ふかき門を妻は閉（とざ）せり　（庭二四・「降る夜」とするは誤り）

光田作治氏を訪ひて共に真如堂より黒谷にかけて散歩す

妻子（めこ）居らぬ安けさをいふ人とゐて陽ざし寒けき二階に話す　（庭三三）

ここにして聞けばひそけし眼下に底ひびきゐる大都の物音　吉田山

国遠く命おとせし人の墓女（をみな）と思ふ墓もあるなり　会津墓地　（庭三三）

小さきは位いやしき人のならん小さき墓はわきてかなしき　（庭三三）

建ちつづく家のむかうにか黒くも法然院の杜（もり）は冬づく

暴風（あれ）あとの樹立は透（す）きて淀八幡国の境の山までも見ゆ

（このとき、原田は先生の供をしていた。光田氏は京都大学の学生課職員であり、水甕の同人で、短歌の朗詠に巧みだった。戦後、神戸正雄氏が京都市長となったとき、光田氏はそのもとで観光局長を勤めた）

二月の動物園

喨々と二月の空に鳴きあげて鵜の鳥は寒くはばたきにけり　（庭二五）

檻に倚りて蚤とりあへる赤毛猿かなしきふぐり垂れてゐるかも　（〃）

仔の母になりてしづけきライオンの豊かなる歩み歩めるはよし　（〃）

動物園に一日遊びて足らひたる子を率（ゐ）てかへる二月の街を（〃）

※前号正誤　一六頁二行　咲てきて　→　咲きて

春夢女史の『誰が罪』（一）

1991 2 8　原田憲雄編

はじめに

春夢女史・坪井すむの小説『誰が罪』が公けにされるのは、たぶんこれが最初である。女史の長女である東京の田中みどりさんが、草稿をわたしに示し、公表することを許された。まずこのことを感謝したい。

わたしは少年のころ、明治の特異な漢詩人、逍遥・中野重太郎の『逍遥遺稿』を愛読した。その二、三を翻訳し、随筆にとりあげたこともあり、一九七五年には「中野逍遥」と題する小論を書いた。十五年たった昨一九九〇年、未知の二宮俊博氏から「『逍遥遺稿』札記」と題する論文三篇を贈られ、遺稿中に見える「春夢子」「春夢女史」については、まだいかなるひとかも研究者の間で分っていないことを知った。女史は逍遥が「紀州に遊び、坪井氏に投じ、徐福の墓を訪」うたとき「共にした」女性である。わたしは新宮市で雑誌『熠祭』を出しておられる若林芳樹大人に尋ねて、女史が「坪井すむ」であり、『逍遥遺稿』に「名は峰青庵」という医師の坪井氏の名は、実は「蜂音庵」であり「ぶあん」と読み、女史の父であることなどを教わった。大人の口添えで新宮市立図書館が坪井家についての資料を数度にわたって提供された。そうして奇しくも、田中みどりさんと文通を開くことができるようになった。みどりさんは、わずらわしいわたしのさまざまの問いに厭わず答え、女史の遺された逍遥の手紙をはじめ種々の資料を示された。そのひとつが『誰が罪』である。

題は「たがつみ」と読むのであろう。上質の半紙を二つ折りにし、第一紙の表に「誰が罪」と大書し、第二紙

から本文がはじまる。毎半葉八行で、一行は二十五ないし三十字。十回に分け、すべて六十三紙（一二六頁）、表紙、裏表紙とも六十五紙を、おなじ紙のこよりで綴じてある。作者名は記さない。いうまでもなくすべて墨書。

内容は、女史みずからをモデルとする藤井倭文子と、中野逍遥をモデルとする岡野一郎との、出会いから一郎の死後にいたる間のことを描く。一八八七（明治二十）年、女史十五歳、逍遥二十一歳、から、一八九六（明治二十九）年、女史二十四歳、逍遥死後二年ころまでに当るだろう。

小説のこととて真偽のほどはわかりませんが　文中の倭文子の心情だけはほんものと思います　そしてそれは　すむ子の心情であり　いかにもわが母らしいと　私は心からうなづかれます

と、この草稿にそえた一月二十六日付の手紙で、みどりさんが言われるように、逍遥に対する女史の、友情からさらに深まる愛情が、伝わってくる。

『逍遥遺稿』雑録は友人達の追悼文を集める。

志士は志士を求め英雄は英雄を求め多情多恨の人は多情多恨の人を求む逍遥子は多情多恨の人なり多情多恨の人を求めて終に得る能はず乃ち多情多恨の詩を作りて以て自ら慰む　子規・正岡正規

いかでかはあつき心のいれられむ氷よりけにひややけき世に　佐々木信綱

寒月沈々長に彼の墓石を照らして秋風颯々永く墳上の樹を吹く嗚呼是れ社会の罪乎将た彼の罪乎人彼に違く乎将た亦彼人に違く乎　寂厳・西谷虎二

これらは逍遥を悼む心情から出た激語で、他の特定の人を責める意はおそらくなかっただろうが、逍遥の愛に

こたえなかったと自覚する女性が読めば、おのれが責められる感じがしたであろう。あるいは人の激語を聞く前に、もしわたしがこたえていたら逍遥は死ななかったのではないか、といった反省をもったかもしれぬ。

『誰が罪』は、春夢女史のそのようなやさしい反省が自らを虐なんだころ、すなわち逍遥の死後数年の間に書継がれたものらしい。小説の描く事柄と、女史と逍遥との交際の実際が、どのように一致し、離れるかは、これを読み終った後に、研究者によってなされるだろう。わたしはとりあえず私意を交えず、できるだけ原文に近いかたちで紹介しようとおもう。ただ、変体仮名や繁体漢字やワードプロセッサにはない「く」の字に似た逗音表記などは適宜変更した。

誰か罪　第一回

同祖父さん誰か英學を教へてくれる人ハ有りませんかね
と今しも讀こかけし本を伏せて偶然思ひ出したる樣に問いふみ
しハ年の頃十五斗にて丸顔の色白目のぱつちりとしたる所に何と

誰が罪　第一回

「お祖父さん誰か英学を教へてくれる人は有りませんかね」

と今しも読みかけし本を伏せて偶然思ひ出したる様に問ひかけしは年の頃十五斗にて丸顔の色白目のぱつちりとしたる所に何とも云へぬ愛嬌をもち鼻筋よく口許のしまりたる漆の様な真黒な房々とした毛の根を高く薄紅梅の広いりぼんにて無造作に結びあらい紺飛白に品の好き友禅の唐縮緬と浅黄繻子の中夜帯をさぞ熱からんに行儀よくしめて机に向つて居る風は嘆き迄の美人にては無けれど逢ふ人毎に「まあ閑雅な品の好いお子だ」と賞めらるる倭文子と云へる藤井玄石が愛孫なり其後の柱に倚りかかり読み居たる漢書を膝の上に置きて玄石は一寸眼鏡の端を上げ其の下から倭文子を眺め

「そうさねお前はいつも夏休に来る毎にそう云ふか此辺に一寸心当りがないがまあ誰かに聞て見ようよ」

「お祖父さんは何時でもあんな事ばツかり云ひては聞いて下さらないんですもの今度はきッとですよ成丈早くね」

と願ふ様な寧ろ甘へたる調子なり玄石はほんとにそうだと云はぬばかりに莞爾と笑へば倭文子も又笑ふ

此藤井玄石といふは七十一歳の老人なるになかなかの気勝もの確かに年よりも十歳ばかり若い者の元気あり業は医士なれど今は隠居の身なり立派なる男子二人迄も有るに何故か倭文子が母を非常に愛しこれに婿を取り後を譲り自分は隠居して彼方此方の孫等にお祖父さんゝゝゝと云はれ極気楽に暮ししが今より四年前の夏六十九迄も連添ひたる妻に死なれ其次の月倭文子が母の死に遇ひ胆落したるあげく倭文子か父の正一は家の都合上国許なる紀州に帰る事となりたれど小供等の教育のため東京でなければ都合悪しとて倭文子は麻布の某女学校へ寄宿なし

兄の俊次は玄石と共に四谷なる親類の離れの一室を借りて住ふ事と成りける

倭文子は兄弟三人有る其中に女一人なれば両親の寵愛斜ならず明けても暮れても倭文子〻〻と唯倭文子の話のみ然るに思ひもかけず今度の不幸父兄弟にさへ遠く離れて馴れぬ窮屈な寄宿舎に竈の鳥同然の身と成りし心細さに夏冬の休みに此祖父の許に帰る事のみがせめてもの楽しみなりき玄石は若き時より学問を好み其中にも漢学をいたく好みたれば倭文子にも進め閑暇の身とて朝より昼まで必ず側につきて教へぬ倭文子も文の道は好みたれど折角の休而も八月の熱い最中なれば随分飽もし嫌にもなり玄石の親切其程にも思はず反て煩く思ひたれどいやと云はゞ忽ち顔色変へて馬鹿者めと云ふか〈が〉玄石の僻なりし故其れか〈が〉怖さにいやながらも近辺の人に感心さるゝまで神妙にいそしみたり

倭文子は未だ英語の事気にかゝりてか「誰かないかしらん」と頻りに考へ初めたる折母屋の方より「お祖父さんゝゝゝゝ」と云ひつゝ走り来れるお秋といへる娘玄石には孫倭文子には従妹なる年は倭文子より二ツ程上容貌は十人並造りは華美の方なるが口のきゝ様年よりませて何処となく下品の所見ゆ之を倭文子と比ぶれば調度菫と蓮華の様なり玄石は眼鏡の上よりお秋を見て

「何んだそんなに倉皇てゝ」

「お祖父さん御存じでせうそらゝゝあの一岡野一郎さんと云ふお方を〈一〉

「一郎…誰れだッけね覚えないよ」

「いやなお祖父さん忘れてしまッたの去年頃よく俊次さんの所へお出になッた方ですよ」

「そーいへばそう云ふ人があッた様だが其人がどうしたのだ」
「其お方がね此夏休には少し東京に用事が有るから国に帰らずにどッか閑静な所に居たいッてつひ此裏にお婆さんの人が一人で住んで居るでせうお婆さんッて未だ五十位の人ねあの方が岡野さんのご存じの方だそうですそれでね今日岡野さんがそこへいらッしやッたんですの而して今ね其お婆さんが家へ来て若し机の不用のが有るなら一月程借して貰ひたいッて来たんですよだけど家には別に不用のがないからお母さんがお祖父さんの所へ居〈行〉ッてお聞き申してこいと云ひたから聞きに来たのお祖父さんの所には有りませんか」
「うゝ有るだろうよ」
玄石は立ッて戸棚を探すお秋は倭文子の側に来て
「貴嬢はご勉強家ですねほんとに感心だわ」
なかゝゝのお世詞者倭文子はかゝる時は何と応ふべきか少し困りたる様にて唯口の中にていゝへと云ひながら後は笑いに間を塞ぎたり
「有るゝゝ立派なのか〈が〉有ッたよ」
と云ひつゝ玄石は大きな一貫張の机十二三人の家族の食卓に調度よさそうな而も埃だらけのを曳きずり出して独り点頭き居るにお秋は
「あーらお祖父さんそりあ余り大きくッてみっともないわねえ倭文子さん」
「ほんとに余りねえ」

と二人は何か〈が〉可笑きかげたゝゝ笑う玄石は机を片隅に置きながら

「何が可笑〈い〉のだお前たちやあ直にみッともないゝゝゝゝと云ふけれど机は大きな方が幾分いゝか知れやしない之れで結構」

お秋は詮方なくやッと可笑さを堪へ

「そんならお母さんにそう云ひませう」

と倭文子と顔見合せつゝ又ぱたゝゝと母屋へ走り行くを玄石はかけかけた目鏡を持ったまゝきつと疾視め馬鹿者らだなあと呟きつゝ眼鏡をかけるのかと思へば其まゝ下に置きて倉皇てゝ

「倭文子ゝゝ調度いゝよ今お秋の云ひた一郎さんは多分高等中学だろうから私が明日英学の事を頼んでやるから解らぬ所をよく研究て置くがいゝ」

「高等中学・・・」

と倭文子は少し驚いた様な声なんだかそんな若い人に恥かしくッていやだ学校の漢学の先生みた様な老人ならいゝけれどゝ思ひしが玄石の気質を知れる倭文子逆ふてはならぬと無理に嬉しそうな顔して

「そーですね調度ようございますね」

とはいひしものゝさあ其れが心配でゝゝゝ男子といへば先生か父か祖父か兄の外は伯父にさへろくに口きゝし事なければ「明日は何といひて行くのであろうあゝこんな事云はなければよかッたのに」と宛も大罪を犯した様な後悔つまらぬ事が少女心に非常な苦労の種と成たり

民話と山姥（上）

1991 2 15　原田慶

いつの頃からか山姥が気になり出した。民話の中に出てくる山姥の自在さと強靭さが羨ましい。雨にも風にも、暑さ寒さにも負けない頑丈なからだを持ち、疲れも知らないように山を駆け廻る。

昨年の夏には、暑さにバテ気味のわたしは、だいぶ山姥に似てきたとからかわれたが、そんな見かけだけではない。山姥は強い。わたしなどが真似のできるようなものではなくて、山の精霊だとも聞く。山姥はえらいのである。

町で、話のついでに、「山姥を知っていますか」と何度かたずねてみたが、「それ何ですか」「ああ、昔話で聞いたことがあります。こわいんですやろ、あれ何ですか」とたずね返された。人のようで人ではないようでもあり、妖怪かと思うとそうでもなさそうな。民話に見える山姥はだいたい似たような恐ろしい容姿を持っているが、山姥とはいったいどういうものなのだろうか。「牛方と山姥」は最もよく知られた話である。

むかしむかし、あるところに、三十郎という牛方がおった。ある日のこと、牛の背中にひだらを積んで山みちをこっとり、こっとり越えてきたそうな。

もうさむいころで、ゆきもちらちらふってきた。日もくれてきた。三十郎はさびしいのをこらえていっしょけんめいにもどってくると、うしろのほうから、「おーい、おーい」とよぶものがある。其の声のきみのわるいことといったら。三十郎はぞっとして逃げ出した。

ところがなにしろ、牛といっしょだ。いくらしりをたたいても、こっとりこっとり、いくばかり。そのまに、その声はどんどんちかづいてくる。三十郎はもうおそろしいのをこらえて、そーっとふりかえってみると、ぎんいろのかみの毛をふりみだした山んばが、まっかな口をかーっとあけて、

「まてえ、三十郎、まてえー」

と、おいかけてくるのだった。

『日本の民話』松谷みよ子作

振りみだした白髪と、耳までさけたまっ赤な口、目はぎらぎらと光り、顔は黒く陽に焼け、ふしくれだった細い手足、痩せた身体、それは、よけいなものをすべて捨て去った人間の正体とでもいうような姿を想像させる。その形で風のように歩き、魚を食い、人を食う。山にはいろいろなけものや鳥もいるのに、人やその家畜などを食べたがる。お寺の小僧さんを追いかけたり、旅人を招き入れたり、山奥に来てひとりでお産をしようとした女を助け、生れた赤ん坊を見て「あなうまげ」と言ったりする。どうして山姥は人を食うのか、それが民話のおもしろいところであり、意味ありげに気味悪いところでもある。山姥は、

「やあれ、くうたくうた。ひだらをひと荷、牛をいっぴきくうたが、三十郎をにがしたのがくやしいわえ」

……

「三十郎のかわりにもちでもくおうか、それともねるべかな」

などと一人ごとを言う。山姥はいつでも一人ぼっちである。だから相手は山の神さん火の神さん。神さんにはさからわない。いねむりをしている間に餅も甘酒も屋根裏に隠れた三十郎に横取りされた山姥は、

「はあて、こりゃねとるまに、火の神さんがくわれたげな。しようない。今夜はもうねるべ。さあて、やねうらでねるべか、それともかまのなかでねるべか」

……

「ははあ、火の神さんが、かまのなか、かまのなか、というているな。それでは、かまの中でねるべ」

釜の中で眠ってしまった山姥に、屋根裏から下りた三十郎が、煮え湯をかけて殺してしまう。あとでみると、それは大きな山ぐもだったということで、妖怪変化の話になっている。

同じ話でも、岩手県のほうでは、釜の中で眠った山姥を二日ほど炊いて、ふたをとってみると、赤いどろどろしたものが残っていたので、気持が悪いと思って外の畑に捨てた。その畑に赤い根を持った人参が一面に生えたという話になっているそうである。その他に、「てんとうさん金の鎖」という話では、留守番をしていた三人の子どもの所へ、母親のふりをした山姥がやってきて、一ばん下の子どもを抱いて寝て、がりがりと食べてしまった。他の二人が、逃げ出して木に登ったが山姥が追って来て、どうしてその木に登ったのかとたずねるので、上の子が、びんつけ油を木に塗って登ったと教える。山姥が真似をしたが滑って登れない。下の子が、そんなことで登れるものか、なたで木に傷をつけて登ったのだと言う。山姥が、そのようにして登ってきたので、きょうだいは困って、「てんとうさん金ん鎖」と叫ぶと、天から金の鎖が下りてきて、それにつかまって逃げた。山姥が同じように叫ぶと、腐れ縄が下りてきて、それにつかまった山姥は、縄が切れて落ちて死んだ。その血の飛び散ったのがソバの根もとを赤くした。というように、作物の発生譚になっているそうである。

吉田敦彦氏によると、山姥は古事記のオオゲツヒメ系の生産の女神で、からだに、無尽蔵に産物を出す力を持っていると考えられるといわれる。焼畑農業を営む山地などでは、山を焼いてソバの種を播いたりするので、山姥は、自分のからだを傷つけながら、人間に幸いをもたらすという、死体化生型の民話なのだと言っておられる。

柳田国男氏の『日本の伝説』の「機織り御前」のなかに、

……ことに山姥は見たところおそろしいけれども、里の人にはいたってしんせつであって、山路にまよってゐると送ってくれる。またをりをりは村に下りてきて、機織り苧積みを手つだってくれるといふ話もありました。またしあはせの好い人は、山奥にはいって、山姥の苧つくねといふ物を拾ふことがたまにある。そのいとはいくら使ってもつきることがないともいひました。また山姥が子をそだてるといふ話も、決して足柄山の金太郎ばかりではありません。

ということが書かれている。「山姥と瓜子姫」は、山姥が瓜子姫の所へ来て、その度に、飯を食べさせろ、スモモを食べさせろ、姫が機を織っていたその糸を食べさせろと言う。瓜子姫が、その度に、いいだけ食べてくれと食べさせてやると、「あしたの朝、窓の外にあるものを大切にしろ」と言って、山姥が帰っていった。翌朝、窓の外を見ると、山のような、山姥の大便があった。親達が「こんな汚いもの、せっちんへでも捨てべえ」と言ったが、姫は「それでも山姥が大事にしろと言ったもの」と川へ持って行ってそれを洗うと、みんな美しい布になったという話だそうである。

古事記の「須佐の男の命」（蚕と穀物の種）のところに、

また食物を大気都比売の神に乞ひたまひき。ここに大気都比売、鼻口また尻より、種々の味物を取り出でて、種々作り具へて進る時に、速須佐の男の命、その態を立ち伺ひて、穢汚くして奉るとおもほして、その大宜津比売の神を殺したまひき。かれ殺さえましし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき、……

とあるように、目鼻口尻などから産物を出すことが、山姥にも共通していると言われる。

これは山姥の民話に対する一つの考え方でよく理解できるけれど、ふつうは山姥を恐ろしい鬼婆だと感じていることが多い。わたしもそう思っていたけれど、真正直で、すさまじいまでの赤裸々な行動に魅力を感じて「山姥になりたい」とふと思ったことがあった。

わたしの学校時代からの友達の松本明美さんは、兵庫県の日本海側で育ち、伝説などを見聞きし、古い習慣を自分もお年寄りと一緒にしてきた人である。わたしなどが、本で読むより他に知らないようなことも、行事として、子どもなりの役割があったようで、聞いていると不思議なこともある。山姥について何か思い出がないかたずねてみた。松本さんの手紙からはいつも景色やそのかすかな気配まで感じられて楽しい。

○村の上を山に入ると谷川に注ぐ更に細い流れがあり、その側に小屋が建っています。ある夕方、山に行っている母を迎えにゆくと、そこに人影がみえました。白髪の背の低いおばあさんが、戸口にぼんやりと見え、すぐ中で何かしているらしく引っこんでしまいました。ああ、あの小屋は山姥の家なのか、恐ろしいという

より、こんなに村里に近い所に異種の人がいることに驚いたものです。もう一つ奥に谷川と道の側に、同じような小屋があり、ある日、何かゴットンゴットンと音がしていて、それにチェッチェッという、鳥のさえずりのような声がまじって聞こえてくるのです。こちらはこわくって、昼間でしたが、そこから上には行かず帰ってきて、祖母に、うちの村には山奥におんばが何人か小さい家に住んでいるのね、と聞き大笑いされました。はじめは私の顔を見てケゲンな表情だったのです。ですから、いい、すごい話が聞けると思っていたのですよ。水車小屋だったのです。そしておばあさんは、近所のおばさんで、奥の水車のチェッチェッの人物は、よそさんと私たちの呼んでいたおしのおばあさんが仕事をしていたのでした。幼い時代はじめて山へ一人で行き出した頃の記憶です。

○四番目の弟が生れる時、朝早く近所の産婆さんを呼びに行ったら、あいにく隣の部落に呼ばれて行っておられ、弟と二人でそこへ迎えに行くことになりました。うすぐらいかわたれ時の田舎道を走って行くと、山の崩れたところを折れて、隣の村へ道は入ります。少し登りになっていて二人でこわいので走って曲ったとたんに、その山崩れの土にはりついていた女の人のあったのを、過ぎてから気がつきゾッとしました。山姥だと思ったわけです。もう夢中で弟の手を引いて走り、後から追いかけてこられないように、つかまらないようにと必死でした。これも後で聞けば村しものおばさんで、多分、田の水盗みか水番を夜中していたからむこうもびっくりしたのかもしれません。常から、うさんくさいことをする人ということでした。山姥を、やまうばといっていたか、もう少し違っていたようにも思うのですが、思い出しません。

私の山姥は実体は田舎のおばあさんの恐ろしい風体の人です。祖父の話には山姥は出てきません。山姥みたいなおばあさんが多くいたせいか、山姥の伝説や昔話は聞いたことがありません。私の経験はこの三つですが、他の女の子は、夕方とか朝くらいうちに一人で外出したりしないので、そういう経験がないのではと思います。私にとって山姥はやはり存在していたのですわね、鬼婆のような人でなく、老婆の風変わりな人。身近に沢山いたように思います。

私が今、母に髪をきちんとしなさいとか、着るものには注意して、こぎれいにしていなさいと、口やかましくいうのは、母が幼い子供にとって、山姥にうつるにちがいないと思うせいでしょうか。

これを読むと、山姥というのは、山にすむ年とった女性ということがはっきりする。わたしはこのような経験がないが、小学生の時、毎夜のように夢の中で鬼婆に追われて逃げまどっていたことがあった。子どもには特に恐怖心の強い年頃があるのかもしれない。松本さんの山姥も、その恐怖心が作り出した、こわい山女の姿なのだろうか。

『折口信夫全集』第二巻「翁の発生」の七「山姥」に、

…山姥は、山の神の巫女で、うばは姥と感じますが、此は、巫女の職分から言ふ名で、小母と通じるものです。最初は、神を抱き守りする役で、其が、後には、其神の妻ともなるものをいふのです。其巫女の、年高く生きてゐるのが多い事実から、うばを老年の女と感じるようになつたらしいのです。…此山神のうばとして指定せられた女は、村をはなれた山野に住まねばならなかった。人身御供の白羽の矢の話には、かう

した印象もあるに違ひない。

このようにして、山野に一人で生きなければならなかった女性が、冬の鎮魂や春の祭りに山のふもとの場に来て、「山姥の鎮魂の舞」を舞い、持ってきた山づとと里の品を取り易えて、山へ持ち帰った。これが市の古義だという。

だんだん山姥を山野に出さない世になって、村の中の人が仮装の山姥として鎮魂の舞を舞うようになった。現在でも能や舞踊の中に「山姥」というのがあるのは、そのような伝説をふまえたものであるらしい。先の文の続きに、

山姥という称呼から、山にゐる女性と考へ、山人を、蛮人又は鬼、天狗などに近づけて想像する処から、此をも山の女怪と信じる様になりました。其村の冬祭りに来た行事が形式化し、竟に型をも行はぬ様になって、伝説化して、名と断片の説話ばかりあつて、実のない時代になり、冬の行事であつただけに、冬の夜話の題材に上る様になつたので、かうした、人であつて、又魑魅の族らしい者を考え出したのでせう。……

と書かれている。山は信仰の対象であったから、その山の神のお守りをするために、村を離れて、一人、山に住んだ人が、常の人と異なった姿になるのは当然のことだろう。かみかくしにあった人の話もよく聞くが、松谷みよ子氏の「山のばあさまの里がえり」もそのような話の一つ。

……いろりをかこんでいた家のものが、はっとしてふり返ってみると、そこに立っていたのは世にもおそろしいばあさまだった。灰色の乱れたかみは、肩のあたりまでたれ、顔の色は澁をぬったよう。肌にはてんて

んとこけがはえていた。木の根のようにふしくれだった手足には、わしのように曲がったつめがはえ、けものの皮をふじづるではぎ合わせたものをまきつけ、よく光る眼で家の者をすうーっとみわたした。

このばあさまはけものの皮を着ていたというが、山姥は、たなばたつめと同じで、村人の近寄らぬ小屋で、来るべき神のために機を構えて神の身とも考えられる神御服(かむみそ)を織っていたというから、毛皮は着ていなかったはずである。山に一人でいて、頼るものもなく、何の武器も持たない人間が、自然の中に生きるなどということが可能だったのかという気がする。当然素速い行動、けもののように研ぎすまされた感覚が必要になる。普通の人間の常識など通用しない、自分にとってどうしても必要なことだけが先行して、他から自分を見ることは必要としないから、世間を気にして生きている小心な人間から見れば、異様でもあり、恐ろしくもある。

地獄が住処

—法華経巡礼 56— 1991 2 26 原田憲雄

3-38. かれらが、たとえぴたりと合った薬草を、経験積んだ人から与えられたとしても、
かれらの病いはかえってますます悪くなり、いつまでたっても病気はけっしてよくならない。(126)
他の連中が盗みを働き、騒動・反乱・争論おこし、
あるいは財貨をかすめ取るとき、悪業をもつかれらの上にそれらの事件が落下する。(127)
世界の保護者・地上に教えを説きたもう王者の王に、けっして会わず、

つねに災難のうちに住む、わたしの説く仏の眼を謗ることによって。（128）
愚かなかれは、耳しいて、知覚もなくなり、法をけっして聞くことがない。
このような、覚りを謗る者たちには、いつでも静寂はありえないのだ。（129）
ガンジス河の砂の数ほど、幾千万億多数のカルパの過ぎ去るあいだ、
愚鈍で、不具な存在として、あるだろう、この経典を謗った悪しき果報である。（130）
遊園地が地獄、かれには、住まいは危険な場所、
ロバやイノシシ、狐に犬、そこに住むかれには常につきまとう。（131）
人間の体となっても、目しい、耳しい、愚鈍であり、
他人の奴隷となって、貧しく、かれはそのとき、これらの不幸で身をやつす。（132）
病気がかれの着物となり、幾千万億の傷が体に生じるだろう。
ヒゼンにかかり、タムシにかかり、かさぶた、むくみ、白斑ができ、死臭を放つ。（133）
体を実在とする見解にとりつかれ、かれの怒りは活気づき、
姪欲さかんで、つねに禽獣の陰門をたのしむのだ。（134）
わたしがたとえ、シャリプトラよ、一カルパかけても、その罪は説きつくせまい、
この経典を謗る者らの罪について、わたしが、いま、述べるとしても。（135）
このことを見抜いているので、あなたにわたしは指示するのだ、

「やはりまた薬を与えられるべき良い形で調合されたもの」で。 (一二六)

yac cāpi te tatra labhanti auṣadhaṃ suyukta-rūpaṃ kuśalehi dattam /

tenāpi teṣāṃ ruju bhūya vardhate so vyādhir antaṃ na kadā-ci gacchati //126//

anyehi cauryāṇi kṛtāni bhonti ḍamarā 'tha dimbās tatha vigrahāś ca /

dravyāpahārāś ca kṛtās tathā 'nyair nipatanti tasyopari pāpa-karmaṇaḥ //127//

na jātu so paśyati loka-nāthaṃ narendra-rājaṃ mahi śāsamānam /

tasyākṣaṇeṣv eva hi vāsu bhoti imāṃ kṣipitvā mama buddha-netrīm //128//

na cāpi so dharma śṛṇoti bālo badhiraś ca so bhoti acetanaś ca /

kṣipitva bodhīm imam eva-rūpām upaśānti tasyā na kadā-ci bhoti //129//

sahasra 'nekā nayutāṃś ca bhūyaḥ kalpāna koṭyo yatha gaṅga-vālikāḥ /

jaḍ 'ātmabhāvo vikaraś ca bhoti kṣipitva sūtraṃ imu pāpakaṃ phalam //130//

udyāna-bhūmī narako 'sya bhoti nirveśanaṃ tasya apāya-bhūmiḥ /

khara-sūkarā kroṣṭuka-bhūmi-sūcakāḥ pratiṣṭhitasyeha bhavanti nityam //131//

manuṣya-bhāvatvam upetya cāpi andhatva badhiratva jaḍatvam eti /

para-preṣya so bhoti daridra nityaṃ tat-kāli tasy 'ābharaṇān imāni //132//

vastrāṇi co vyādhaya< W:vyādhayu> bhonti tasya vraṇāna koṭī-nayutāś ca kāye /

vicarcikā kaṇḍu tathaiva pāmā kuṣṭhaṃ kilāsaṃ tatha āma-gandhaḥ //133//

sat-kāya-dṛṣṭiś ca ghanā 'sya bhoti udīryate krodha-balaṃ ca tasya /

saṃrāgu tasyātibhṛśaṃ ca bhoti tiryāṇa yoniṣu ca so sadā ramī //134//

saced ahaṃ śārisutādya tasya paripūrṇa-kalpaṃ pravadeya doṣān /

yo hī mamā etu kṣipeya<W:kṣipeta> sūtraṃ paryantu doṣāṇa na śakya gantum //135//

saṃpaśyamāno idam eva cārtaṃ tvāṃ saṃdiśāmī ahu śāriputra /

mā haiva tvaṃ bāla-janasya agrato bhāṣiṣyase aūtraṃ im 'eva-rūpaṃ //136//

わたしが「ヒゼン」…「白斑」と訳したことばは、妙本では「水腫」……「疥癩」などの文字を当てている。これが現在の医学でいうそれぞれに当たるかどうかはわからない。わたしの弟の原田禹雄は、らいの専門医で、中国の医学書に見える「癩」についての研究があり、そこでも「癩」がいまいう「らい」であるとは限らないといっていた。それはそれとして、『法華経』にこのような言いかたがされているため、仏教は病人や身体障害者を差別し蔑視するという非難が起こっている。仏教徒に、その非難に責任を負うべき面があったことを、わたしは仏教徒のひとりとして痛切に反省する。しかしその差別や蔑視は、『法華経』にたいする誤解から生じたものと考えられる。『法華経』は、「すべての衆生は、平等に、仏に成らねばならぬ」というのである。その立場を謗るのは、平等を否定することで、平等を否定すれば、差別が生じる。いったん差別を認めるとき、差別はすぐに正義となる。正義の名において、侮蔑も虐待も正当化される。正義の名において戦争が正当化されるように。